

キチガイ達が暴れるだけの、そんな話。

シニカケ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本はゾンビによって滅ぼされた。
そんなセカイの後日談。

(他国にはゾンビが出現してません。)

キチガイ注意警報。

キチガイの一人語りの短編集です。

目次

ササニシキのセカイの終わり	1
オキタソウジのセイキマツ	5
オオコノサカチカイのレンアイ事情	8
サイトウラブリイのコウフク論	12

ササニシキのセカイの終わり

このセカイは終わってしまった。
それでも、諦めない僕らは戦う。

「グオオオオオ！」

「ニシー！そっちに行つたぞー！」

唸り声を上げながら、それはタツクルを見舞おうと迫ってくる。
肉が腐つた人間の姿。それはゲームや映画で見た通りのゾンビで、
見慣れない内は現実なのか目を疑う光景だ。

残念ながら、僕達は見飽きる程に見慣れてしまったけれども。

哀れな化物に少しだけ黙祷を捧げ、鉄パイプを振りかぶる。

「大丈夫だよ、チカ。」

鉄パイプは正確に、ゾンビの頭を潰していた。

化物が現れたのは一ヶ月前の、何時も通りの月曜日のことだった。
僕は学校に行く前に、外の異常に気づいていた。

『速報です。只今全国一斉に謎の暴動が起こっています。外出は控え
ドアに鍵をかけて——』

「……だって。母さんも仕事止めといたら？」

無駄だと思しながら、一応忠告した。案の定鼻で笑われる。

「何が暴動よ、アホらしい。あんたも学校だけは行きなさいよ。また
あの熱血教師に呼び出しくらうの、嫌だから。」

「ごめんなさい。」

ふん、ともう一度鼻で笑って玄関のドアを開けた母さんは、そのま
ま僕の目の前でゾンビに食われた。

首がとれたのを見て、ゆっくりその場から離れる事にする。

足音をたてないように気を使いながら部屋に戻った僕は、思わず溜
め息をついてしまった。

「だから、言ったのに。」

その1時間後、連絡のついたチカが迎えにきてくれた。
あれから一ヶ月。ずっと一緒に行動している。

「ニシ、怪我無いか？」

チカが周囲を警戒しながら走ってきた。

つられて辺りを見回すが、怪しい影は無い。

笑って手を振ると、チカはほっとした顔を見せた。

「チカ達こそ大丈夫？ 全員無事？」

「残念ですが、笹下さんが亡くなりました。バカが一人重傷ですが、こちらは気にしなくとも良いでしょう。」

ゆつくりと、チカの後ろを歩くツインテールの少女が言った。

「…そっか。ソウジもお疲れ。」

頭を撫でてやると、総司は気持ち良さそうに目を細目ながら子供扱いするなど怒る。

それが面白くてついつい、もつと撫でてやる。

総司のサラサラの髪は触り心地がいいのもあって、つい夢中になっていた僕は背後に忍びよる人影に気づかなかつた。

「ソウちゃんをいじめるなハゲ！」

「グフツ！」

脇腹に肘鉄が刺さり悶える僕にアイは冷たく一瞥するだけで、総司にすぐに抱きつく。

「ソウちゃん大丈夫？ 襲われてない?！」

とんでもない事を口走りながら、総司の頭をアイも撫で回す。

アイは総司を溺愛している。ヤンデレの気もある少しヤバイが、戦力的には頼れるヤツだ。

「大丈夫です。ニシさんはヘタレなので。」

「あー、うん。ニシってヘタレだよな。」

「ちよつと待てや。」

ヘタレではない。断じて違う、筈だ。

「おい、騒ぐな。次が来ちまったぞ。」

少し離れた見張りをしていたトシが、げんなりとした表情で向こう

を指差す。

トシはつい最近合流したせいか、あまり僕達に馴染めていない。笹下さんや大見さんと違って、年齢が近いからこれから仲良くなっていけたら良いなと思っっている。トシは僕達の事が苦手みたいだけど。

「アイ！敵だつて！」

「ソウちゃん良かったね！思う存分、やっちゃって！私がサポートするよ。」

「俺も行く。ぶち壊してやるよ。」

途端に三人は目を輝かせ、暴れる準備を始める。

僕は少し迷って、この中ではまだ常識人のトシと同じくげんなりする事にした。

「おい、ニシ。お前もキチガイ仲間だろうが。あいつらと一緒に特攻してこいよ。」

「今日は無理、気分的に。それに、あの三人で大丈夫でしょ。」

やっぱりキチガイ仲間だ、とぶつくさ言うトシを無視して上を見上げる。

空は数週間前、飛行機雲やらよく分からない煙やらで一杯でとても白かった。

国外脱出を試みた日本人は多かった。

けど外国に着く前に乗り物の中にゾンビが紛れてたり、他国のミサイルに打ち落とされたり、普通に素人が運転して事故起こしたり。あまりにも無謀な挑戦だったと聞いた。

それに、もし脱出出来たとしても受け入れてくれる国は無かった。

自衛隊の笹下さんは、政府が泣き喚きながら受け入れ交渉をしていたと教えてくれた。

もし、他国に住もうとするなら密入国しかない。見つければ化物になるかもしれないと怖がられて殺される、そんなリスキーな毎日を送る。

だから止めておけ。
そう言われたので、僕達は諦めた。

この空の向こうには、もう道はない。

僕達はこのセカイから出られず、ここで死ぬ。

「大丈夫、私はあなたを愛します。だからすぐに殺してあげます。」

「ソウちゃん格好いい！……ッ！邪魔者は消す。」

「ぶち壊してやる！ミオが帰って来れるようにな！」

「うっわぁ。こいつら見ると、俺がしてきた犯罪がちやちな物に見えるてくるぜ……。」

でも。皆と同じ最期なら、悪くないかも。

S i d e : 佐々 錦

最期は一緒に。

オキタソウジのセイキマツ

私の愛を受け取って欲しかった。

「愛させて欲しい。」

その願いが叶うなら、セカイの終わりも悪くない。

「某漫画の世紀末って感じだな。戦争が原因でも、世界が終わりでも無いけど。」

「……セイキマツ、って何ですか？」

聞き覚えの無い単語に首を傾げる。チカイ先輩に問うと、快く教えて頂けた。

「世界の終わり、みたいな意味だよ。ノストラダムスの予言みたいな。」

「それ、外れましたよね。」

小さな頃に、どうせ世界は終わりじゃー！みたいな予言を信じた人が居たらしく、この国がパニックになった事があった。

因みに私の父もその一人である。今にしてみれば恥ずかしいと語っていた。

「有名な予言だったから、それを題材にした漫画があったってわけ。設定では戦争で目茶苦茶な世界になってんだ。」

「確かに似てるのかも知れませんが。戦争が原因ではないし、日本以外はセイキマツではありませんけれど。」

荒廃した国。人の生活の名残の残骸をぐるりと見渡した。

セカイの終わり。そうかもしれない。

「……それ、世紀末の使い方間違ってるから。」
「てへぺろ。」

「古ッ！」

セカイの終わり。セイキマツ。

とつても素敵だ。

「ソウちゃん、次5体来るよ！」

アイが耳打ちすると同時に気分が高揚する。指差す方を見ると確かに5人、確認できた。テンションが上がる。

「アイは3と2どっちが良いですか？」

余計な事を聞いてみる。アイは私にとっても優しい。私の考えを理解は出来てないのに、察して上手く立ち回ってくれる。

「ソウちゃんは思う存分やっちゃえば良いんだよ。私がちゃんと合わせて、サポートするから。」

「アイ。ありがとう。」

「ソウちゃんのタメ口、キター!!死ねる！」

アイは優しい。変だけど。

そうこうしていると、敵が近づいてきた。その内の一人が飛び出して来る。

「ソウちゃん！」

「アイ、大丈夫です。……あの子を愛して来ます。」

愛させて。あなたを見せて。愛してあげる。大丈夫私はあなたをちゃんと理解できる。真っ直ぐに私に向かっている。私を食べたいのね。大丈夫。私がちゃんと愛してあげる。あなたを完全に理解したわ。失敗すればすぐにアイを襲うのでしょうか？分かるわ、でもごめんね私が愛してあげるの。そう愛してあげる。大丈夫一瞬だから。痛覚は無いと思うけど、次が来ちゃうからすぐに首を屠ってあげる。だから愛させて。

『総司、剣道の極意を教えてやろう。』

剣道は相手を見切れねば勝てぬ。よく見て、理解しろ。行動を全て読みきれ。最強の剣豪になるために。

お前には俺すら越える才能がある。お前が二代目沖田総司となる為に、一目で敵を完全に理解出来るようにしろ。心を全て暴いて、全てを見透かすのだ。

恋をするように、理解しようとして努力しろ。』

昔、セイキマツの予言よりずっと前に父はそう言った。

私はその教えを守って戦っている。

けれど。その思考は異常であると、すぐに理解した。だから隠し続けた。

弱くなると知りながら、愛する事をせずにはひたすら相手を睨んで竹刀を振るった。

でも、このセイキマツとこのセイキマツを一緒に歩くアイは分かってくれる。

「愛してあげる。だから愛させて。」

私はこのセイキマツを、愛せる幸せを噛み締めた。

Side：沖田総司

この絶望ごと愛してる。

オオコノサカチカイのレンアイ事情

俺は未央とはぐれてしまった。

あいつは強がり、本当は怖がり、泣き虫で暗いところが苦手、俺が居ないとダメなヤツなんだ。

俺も未央が居ないとダメなヤツだ。未央が居るから生きられる、未央の隣だから生きられる。

小さい頃に両親が離婚した。俺は父さんに引き取られたが、それからは毎日殴られた。

素手、バット、本、酒ビン、椅子、灰皿、傘、鍋、フライパン、植木鉢、机、テレビ、体重計、グラス、殺虫剤、箒、鏡、鞆、本棚、扇風機、麵棒、卓上ライト、リモコン、ガラスケース、ラジオ、電卓、延長コード、ガスコンロ、皿、湯飲み、まあとにかく色々。

父さんは母さんに浮気されたらしい。母さんに似た俺を殴りながら、ざまあみろと何度も叫んでいた。

俺は父さんが可愛そうだと思った。だから、誰にも言わなかったし黙って殴られていた。

「それ、いたくないの?」

小学三年生の時、隣の席になった未央から声をかけられた。

その日の前日、父さんは卓上ライトで俺の腕を強く殴った。そのままにしていたら、真つ青な痣が出来ていた。

未央はそれを指差した。

「いたくない。」

「ウソだー。こんなにすごい色してるのに。」

父さんは可愛そうなんだ、俺が守らなくちゃ。当時はそれだけしか考えてなくて、未央を黙らせたくて。

「いたくねえっての!!」

「きやあー!」

気がついたら、未央を殴っていた。

「おおこのさか、いけねーんだ!!」

「何やってんだよおおこのさか!」

「サイテー!このでいーぶい男!」

「しおたさん、だいじょうぶ?!」

普段は俺に近づこうともしないクラスメイト達が一齐に喚き散らした。他のクラスからも野次馬が来ては囃し立てる。

昼休みだからか、先生は来ない。

そんな周りの状況なんて、その時の俺は見えなかった。あんなに騒々しいのに、何も聞こえない。

「……………あ、」

見えるのは未央と、未央を殴った拳だけだった。

だんだんと頭が状況を理解する。体がブルブル震えた。

殴った感触が消えてくれない。柔らかくて中身が硬い何かに手をめり込ませてぶつ飛ばした。

倒れた未央はただ呆然としていた。頬が真っ赤になって痛そうだった。

ふと、可愛そうな父さんの顔が浮かんだ。

俺も可愛そうなヒトになってしまった。

なら、この手も父さんが俺を殴る手と同じ。父さんの怖い手だ。

理解すればするほど、俺は自分に恐怖した。

そんな俺を可愛そうだと思ったのだろうか。

「おおこのさかくん。」

未央は俺の手を、自分の両手で包んだ。

「お、まえ、なににして」

「びっくりさせてごめんね。わたし、だいじょうぶだよ。」

真っ赤に腫れた痛々しい顔で、未央は笑った。

「おおこのさかくん。ごめんね。」

そう言つて、未央は簡単に可愛そうな俺を受け入れてくれたんだ。

中学に上がる頃には環境もだいぶましになって、ニシとも仲良くなった。ニシも大事な友達だけど、未央はそれ以上に大切だ。

未央が居たから、俺は。

「ニシ、未央は大丈夫だよな。」

まだ原型を留めた一軒家を見つけた。今日は見張りをたてながら、ゆつくりすることになった。

眠れなくて家の中を彷徨っていたら、見張りをしていたニシを見つけてつい聞いてしまった。

気まずい沈黙に、早くも後悔する。

ニシは少しだけ目を瞑つて、それからゆつくり頷いた。

「うん。……そうだね。」

ニシはそう言った。

分かつてる。未央一人で生きるには、過酷過ぎる。

でも諦めねーよ。諦められるかよ。世界で一番愛してるんだ。

「近くを見てくる。すぐに戻るから。」

鉄バットを持って玄関へ向かう。ニシは止めなかった。

「チカ先輩。」

途中でソウジと会う。ソウジの目線がバットへ行き、少しの沈黙の後ヘルメットを持たされた。

「防具も着けて下さい。危ないですから。」

ソウジの躊躇いと諦めが伝わる。心配してくれる仲間がいるのも、あの時未央が居たからだ。

感謝を込めてソウジの頭を軽く撫でた。

「ありがとな。ソウジ、頼んだ。」

「子供扱いしないで下さい！……気を付けて。」

未央、大好きだ。未央。

どうして、ニシの家を出てから居なくなってしまったんだ。

S i d e : 大不來坂 千海
未央は死んでなんかいない。

サイトウラブリイのコウフク論

誰にもあげられない。私だけのものになって？
ソウちゃんは可愛い。

敬語で、ツインテールで、学生で、色白で、目がくりつとしてて、強くて、でも優しくくて、本当は愛した相手を殺すのは抵抗を感じてる。私はソウちゃんの愛を理解出来ない。

私がゾンビにならない限り、「愛して」もくれない。
でも、私のソウちゃんदैいてくれるなら我慢できる。我慢、しないと。

「ソウちゃんをいじめるなハゲ！」
「グフツ！」

ソウちゃんの頭を撫で回しやがったソウちゃんの照れ笑いを見やがったソウちゃんの頭を堪能しやがった。仲間のニシでも許せない。脇腹にクリーンヒットした肘鉄が刺さりニシは悶える。ニシを踏まない様にだけ注意を払い、ソウちゃんに抱きついて息をつく。

大丈夫、我慢。
気持ちが悪く落ち着くまで、2秒。ソウちゃんの髪を弄ると、だいぶ落ち着いた。

それから、改めてニシを見る。
やり過ぎたかなと思っただけど、ニシはこつちを見てしようがないなとばかりに苦笑したので大丈夫と判断した。

「ソウちゃん大丈夫？襲われてない?!」
何を言うんだ、とばかりにニシが目を見開く。でも、私の気持ちが落ち着いた事に安心して居る気持ちも伝わる。

「大丈夫です。ニシさんはヘタレなので。」
ソウちゃんも私の気持ちを理解して、軽口を叩いた。
「あー、うん。ニシってヘタレだよな。」

チカはよく分からない。けど空気を読んだのか、冗談に付き合う。
「ちよっと待てや。」

ニシがツツコミを入れて、ほのぼのとした雰囲気になる。本当に、良い人達ばかりで少し困ってしまう。

私は異常なのに。

私は異常くらい執着心が強い。

全てのものはいつか壊れてしまう。壊れて私を置いてきぼりにする。

それは物でも、者でも。

置いてきぼりにしないでと願っても。

ずっと一緒にいると約束しても。

縛りつけても、監視しても、閉じ込めても、誘惑しても、

いつか。必ず私を置いてきぼりにする。

私はそれを知ってから、ますます執着するようになった。

でも、何でもかんでもではなく自分のものだけ。そう制約をかけた。

ソウちゃん達は、数週間前に出会ったばかりだ。

私は委員会の資料作りのために、あの日は早く学校に来ていた。

朝練をしていた運動部の誰かがゾンビに食べられているのを見て、私は委員会の部屋に立て籠った。幸い小さな冷蔵庫の中に、皆のおやつやお茶が入っていたのでそれだけで十数日過ごした。

辛くて、ソウちゃん達に助けられた時にはお礼も言えない程に衰弱していた。栄養が足りなくて踞る事しか出来なかった私に手を差し伸べたソウちゃんが、ヒーローみたいで。

ほしいなあ。

つい、思ってしまった。

人が欲しいと思ったのは、久しぶりだった。我慢しようとは思った

けど、一週間も経たない内にカミングアウトした。

今もソウちゃんは私のものじゃない。私はソウちゃんの仲間として、サポートするために隣に立つ。

この現状はちよつとは言えない程に苦しい。もしかしたら立て籠った時より辛くて死んじやいそうな気になるけど、私は今は我慢することにした。

だってソウちゃんが好きだから。

家に置いてあるコレクションも、学校にある私のものもどうなつてのかが気になって眠れない。

けど今一番欲しいのはソウちゃんで、ソウちゃんから絶対離れたくないと願ってしまっているから。

それに、この執着を理解しようとしてくれる仲間もここにはいるから。

私はこのセカイ自体に、執着しかけているのかもしれない。

立て籠っている間は辛かったけど、ずっと何も出来なくて校庭を見ていたからゾンビがどうして増えるのかを知ることが出来た。

ゾンビに食べられた人は、脳を食べられてなければゾンビになる。

ゾンビになるのにまる1日から2日かかり、人間なら死体でも食べる。

ゾンビには視力があるようだ。遠くでも、目が合うと近づこうとする。

運動神経は個体に差がある。損傷部分が原因の時もあるけど、鉤爪とか明らかに後からパーツをつけたようなのとか、最早人の形をしてないのとかもいる。そういうのは校庭の外からだけ現れた。

人以外は食べようとしらない。それは正にゲームや映画のゾンビのようだった。

まるで。ゲームや映画のゾンビを参考にしたかのように、共通点は

多い。

「おい、騒ぐな。次が来ちまったぞ。」

トシが私の至福の時の終わりを知らせる。……爆破すんぞ。冗談
だけど。

「アイ。」

ソウちゃんがそっと耳打ちする。

「何?」

「また一緒に暴れてくれますか。」

そう言つてソウちゃんは、優しく笑つた。

S i d e : 斎藤愛凜

それは苦くもおもしろい。